

皮膚科学

(旧・基質代謝治療学)

藤田 優，鎌田 憲明，松江 弘之

千葉大学医学部百周年記念誌（昭和53年）において当時の岡本昭二教授が，竹内勝教授時代（昭和27～45年），それに続く岡本教授時代初期（昭和45年～昭和48年）の皮膚科学講座について記されています。今回の135周年記念誌におきましては，退官されるまでの岡本教授時代（平成5年まで）を藤田優先生，新海教授時代（平成5年～平成18年）を鎌田憲明先生，その後（平成21年末まで）を松江が担当いたしました。

岡本昭二教授時代（新病院開院より）

昭和53年は新病院（現病院）開設の年である。2月には15日から28日まで外来診療を停止し，2月23日には在院した入院患者を新病院に移送した。岡本昭二教授はその責任者を務めた。移送は午前中に終わったが，午後からは春の嵐が吹いた。3月1日からは外来診療が始まり皮膚科は地下1階になった。また病棟は9階西に28床で始まった。しかし医局員の数は減少しており，診療はかなり難渋していたが，この年5名の医局員の入局があり，ようやく軌道に乗った。昭和54年6月には旧病院（現本館）は研究教育棟として一部改修が終わり，皮膚科は3階南東（旧病室のところ）に移った。

昭和55年5月，数年間闘病中であった田辺義次助教授が逝去された。岡本教室誕生以来，教室の研究・診療の中心だった先生の逝去は，教室にとっても，医局員にとっても大きな痛手であった。

昭和56年6月には岡本教授就任10周年記念千葉皮膚科臨床談話会が行われ，宮治誠教授（千葉大生物活性研究所）鬼塚卓弥教授（昭和大形成外科）の特別講演が行われた。このころ宮治教授のもとには岩津都希雄先生が外向し，黒色真菌の研究を行っており，鬼塚教授のもとには長谷川隆先生，続いて寄藤和彦先生が勉強に出かけ，医局に帰ってからは悪性腫瘍の手術療法の中心となって活躍した。1月には岩崎光順先生が国保旭中央病院医長として外向，12月には藤田優講師が助教授に昇任した。

昭和57年5月には東京で第16回国際皮膚科学会が開催され，岡本教授はSTDおよび梅毒のシンポジウムで「Actual problems of STD in Japan」「Treatment

of Syphilis」，また若林正治先生は「モノクロナル抗体による黒色腫抗原の解析」を発表した。秋には岡本教授はヨーロッパ，主に西ドイツハイデルベルグ大学に文部省短期在外研究員として出張した。

昭和60年10月第49回日本皮膚科学会東日本学術大会が千葉県文化会館で教室の主催で行われた。10月には小林まさ子助手が講師に昇任した。

昭和61年4月には岡本教授は日本皮膚科学会東京支部長に就任した。昭和62年1月には神戸の女性がAIDSで死亡し，国中がAIDS騒ぎに巻き込まれることとなった。岡本教授は国内外のAIDSやSTD関連学会への出席や厚生省の会議，また各地での啓蒙のための講演で多忙であった。また教授ご自身，5月には下顎腫瘍の手術を受けることとなり，2カ月の休養の間，教室はかなり混乱したが，医局員全員の協力により，この難局を乗り切ることができた。5月には第17回世界皮膚科学会が西ドイツ，ベルリンで行われ，藤田助教授が「Pseudoheterozygous type II hyperlipoproteinemia」，児島孝行先生が「Heterogeneity of DNA-repair mechanism in cells from Bloom/SS syndrome and Cockayne syndrome patients」を発表した。昭和63年9月には第1回日中皮膚科学会が北京市で開催され，教室からも岡本教授はじめ，田辺恵美子，伊藤美香先生らが参加し，発表を行った。

平成元年4月に岡本教授は附属病院長に就任した。また先生が長年にわたり主催されていた性行為感染症（STD）研究会は前年泌尿器科など他科とも合同して日本性感染症（STD）学会として発展，発足した。その第2回学会は平成元年12月，東京品川コクヨホールにて岡本教授の主催にて行われた。

平成3年7月，田辺恵美子先生が新設の東邦大学佐倉病院の皮膚科部長・講師として赴任。秋にはドイツ・ゲッチンゲン大学からアイスフェルダー先生が国費留学生として来日した。平成4年4月にはアメリカ・ミシガン大学の留学から帰国した児島先生が講師に昇任し，寄藤和彦先生が成田赤十字病院皮膚科部長として赴任した。同年6月ニューヨークで行われた第18回世界皮膚科会議には岡本教授はじめ医局員数名が参加し，藤田助教授が「Evaluation of serum lipids and plasma apoprotein in xanthoma palpebrarum」の発表を行った。

平成5年2月には岡本教授の最終講義が「皮膚疾患の変遷」と題して行われた。内容は先生の研究主題であるSTD、とくに梅毒のほか、教室の課題であった真菌症、とくにスポロトロコシス、黄色腫、乾癬、皮膚悪性腫瘍、とくに黒色腫の諸疾患の症状、治療の変遷、原因解明の現状と問題点の講義だった。岡本教授は3月末に退任し、その後、千葉大学名誉教授、ドイツ皮膚科学会名誉会員と称号を授与された。岡本教授退任時のスタッフは助教授・藤田優、講師・小林まさ子、児島孝行、助手・永井秀史、黒田啓、望田篤、斎藤次郎、医員・外山桂司、鈴木裕、江口奈緒美、西内徹、早川治、倉沢京子、金田美紀、研修医・池田栄一郎、早川千絵、清水真樹、澤井まゆみ、角田寿之、宮崎達也、三枝正明、吉田典代、宍戸真理、文部技官・山田恵子、佐藤興子、斎藤力子であった。

新海宏教授時代

平成5年10月、岡本教授の後任として大分医科大学（現大分大学）より細胞外基質に関する研究の第一人者であった新海宏先生が着任され、平成6年4月、新体制がスタートした。新海教授は医局員に「日付が変わるまで帰ってはいけない」と教育されたが、教授自身深夜まで仕事をされていた。そんな中、毎晩気分転換に医局員を見回りにこられることから、他教室の先生方の間で「夜の教授回診」と評判になった。7月、留学されていた築藤玲子先生が米国ロックフェラー大学から帰国した。また、長い間教室の診療を支えてくれた佐藤興子技官が退職した。

平成7年3月、児島孝行講師、小林まさ子講師がそれぞれ開業、川鉄千葉病院へ出向され、代わって川崎医科大学から簗持淳先生が講師として、大阪大学形成外科からは坂井靖夫先生が助手として着任した。簗持先生は主に研究面の、坂井先生は手術面の指導に当たった。

平成8年3月、長年当教室で病理組織作成を担っていた山田恵子技官が退職、また藤田優助教授が船橋医療センター皮膚科部長として出向した。4月から山田技官に代わって及川綾子技官が着任し、簗持講師が助教授に昇任した。7月、米国DNAX研究所に留学していた遠藤秀治先生が帰国した。

平成9年3月、坂井先生が大阪大学へ異動、京都大学から宇谷厚志先生が講師として着任した。

平成10年1月、築藤先生が講師に昇任した。3月には、竹内教授時代から秘書として勤務を続けてい

た斎藤力子技官が退官を迎えた。斎藤技官は千葉大皮膚科の歴史の生き証人であっただけに、惜しまれる退職となった。代わって、吉田和代が事務補佐として秘書を引き継いだ。4月、築藤講師が国立千葉病院へ出向、6月には黒田啓先生が米国へ留学し、代わって7月慶応大学から小林孝志先生が助手として着任した。

平成11年6月、岡本昭二名誉教授が逝去された。病魔を克服され、退官後も開業されて診療を続けられていたと聞いていただけに、突然の訃報であった。

平成12年7月、黒田先生が米国 Mount Sinai Medical Center から帰国、栃木県厚生連下都賀総合病院へ出向された。

平成13年4月、吉田和代が退職し、櫻井敏江が事務補佐として秘書を引き継いだ。

平成14年には宇谷講師が「A unique sequence of the laminin $\alpha 3$ G domain binds to heparin and promotes cell adhesion through syndecan-2 and -4.」で日本結合組織学会大高賞を受賞した。10月、黒田啓先生が防衛医科大学皮膚科講師として異動した。

平成15年1月には当教室が第26回皮膚脈管膠原病研究会を千葉・メルパルクプラザにて開催した。2日間にわたって好天に恵まれ、遠方からも多くの方々に参加頂いた。5月には簗持助教授が独協医科大学に異動し、代わって宇谷講師が助教授に、小林孝志先生が講師に昇任した。

平成16年3月に宇谷助教授が京都大学へ異動した。4月から新海教授は日本皮膚科学会東京支部長に就任した。

平成17年2月には第68回日本皮膚科学会東京支部学術大会を東京・京王プラザホテルにて当教室が開催した。前夜は雪混じりの天候で、予想を下回る参加者数が危惧されたが、幸い学会当日は天気も回復し、2日間で参加者が1000名を超えるほどの盛会のうちに閉幕した。3月までに5人が退職、加えて前年度から始まった研修医制度の影響もあって、4月からの新海教授最後の年度は、医員・研修医が不在の8人体制でスタートした。外来改修工事や新病棟計画、東京支部代議員選挙なども重なって医局員の疲労は限界を極めたが、医局員の固い結束によりこの難局を見事乗り切ることができた。そんな中、小林講師が「Leptomycin B reduces matrix metalloproteinase-9 expression and suppresses cutaneous inflammation.」で日本結合組織学会大高賞を受賞したのは医局にとって嬉しい出来事であった。

平成18年2月には新海教授の最終講義が「細胞外

マトリックス疾患研究との出会い」と題して行われた。会場の附属病院第一講堂は学生で埋め尽くされ、厳しいながらも学生をこよなく愛した新海教授を印象付ける光景であった。内容は教授が研究を始めるきっかけとなった強皮症との出会いから始まり、千葉大に來られるまでの研究の数々、そして教授が最も力を注いでいた「デルマトポンチン」に関する研究成果と今後の展望で締め括られたが、教授が半生を捧げたと言っても過言ではない内容には圧倒される思いであった。新海教授は3月末に退任されたが、その後千葉大学名誉教授の称号を授与された。新海教授退任時のスタッフは、講師・小林孝志、助手・鎌田憲明、米山啓、外川八英、金親香子、宮川健彦、木下恭子、大学院生・溝口雅子、技官・及川綾子、事務補佐・櫻井敏江であった。なお、新海教授は大の阪神タイガースファンであったが、最終年度の優勝は新海教授の退任を祝福するかのようであった。

松江弘之教授時代（平成18年9月1日～）

2006年9月1日付けで新海教授の後任として、山梨大学医学部より松江弘之教授が就任した。松江教授は本学出身（昭和62年卒）で、卒業後は故郷に戻り、北海道大学皮膚科（主任：大河原章教授）に入局、皮膚科を研鑽し、研究面では米国テキサス大学サウスウエスタンメディカルセンター（ダラス）の高島明教授に師事し、皮膚免疫学特に樹状細胞の研究で業績をあげた。2003年に、山梨大学医学部皮膚科（主任：島田眞路教授）の講師（後に助教授に昇任）として帰国した。

2007年1月31日付で小林孝志講師が、防衛医大助教授昇任のため転出した。2007年4月1日から、京都大学より神戸直智講師が就任、鎌田憲明助手が講師に昇任した。また6人の後期研修医が新たに加わった。大学院医学研究院の研究分野の名称を、「基質代謝治療学」より「皮膚科学」へと変更した。千葉大皮膚科のミッションとして、次の3つの目標を掲げた。

- 1) 当科を受診される患者様に最適な医療を提供する。
- 2) 高い倫理感・責任感とコミュニケーション能力を備え、絶えず診断・治療技術の向上を目指す皮膚科専門医を育成する。

- 3) 皮膚の正常と異常の科学的理解を深め、より良い治療に役立てる。

教室を預かる者として、医局員一人ひとりがこれらの目標を達成するためのより良い環境・手段の提供を目指している。

研究では神戸講師の指導のもと大学院生中村悠美が、自然炎症性疾患の症状の一つである蕁麻疹様皮疹の病態を解明し、Journal of Experimental Medicine (JEM) (206:1037, 2009)に掲載された。掲載号の表紙のモチーフ（図）とIn This Issueで紹介された。現在は炎症・免疫・アレルギーを中心に、千葉大学グローバルCOEプログラム「免疫システム統御治療学の国際教育拠点」の一員として、他科・他施設と連携しながら若手研究者（physician scientist）の育成を加速化させ、次世代を担う皮膚科医の育成を目指している。

臨床では、人口600万人を抱える千葉県下から数多くの悪性腫瘍の患者が紹介されている。2008年度の主な入院手術は、有棘細胞癌：23人、悪性黒色腫：18人、外陰部パジェット病：13人、基底細胞癌：32人、ボーエン病：11人、汗腺癌：9人などである。外来手術は年間700件前後（2007年度）で、その内訳は大半が皮膚生検であるが、全摘手術：190件、植皮術：27件、その他：12件と比較的大きな手術も局所麻酔で施行可能なものについては外来にて行っている。また、2007年度より外来化学療法室が整備されたため、当科においても一部の皮膚がん患者さんに対する抗がん剤治療を外来にて開始した。今後は免疫アレルギーの研究に加えて皮膚癌の臨床研究を継続的に展開できる体制の構築を目指している。

2009年10月現在の皮膚科職員の構成は、教授・松江弘之、講師・神戸直智（病棟医長）、講師・鎌田憲明（医局長）、助教・外川八英（外来医長）、米山（木下）恭子、末廣敬祐、岩澤（高橋）真理（大学院1年）、大久保倫代（育休中）、医員・中野（大谷）倫代、小俣渡（大学院2年）、佐藤貴史（大学院2年）、大田玲奈（産休中）、塚本利朗、シニアレジデント・秋田文、木村亜矢子、特任研究員（G-COE）中村悠美（米国・ミシガン大学長期出張中）、検査技師・及川綾子、事務補佐・櫻井敏江、水野亜紀。

（ふじた まさる，かまだ のりあき
まつえ ひろゆき）